
ギルティ ～罪を背負う聖者～

武藤 徹也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギルティ ～罪を背負う聖者～

【Nコード】

N9677Y

【作者名】

武藤 徹也

【あらすじ】

魔法が現代の技術になった世界。そこに化物を身に宿した鬼柳雁也という少年がいた。その少年は自らに潜む化物を殺し元の体に戻るべく、『ロンギヌスの槍』と『聖杯』が保管されていると噂される私立大学付属王光高校に入学した。そして雁也を中心とした波乱日々が幕を開けた。

1 - (1) 笑顔、それは恐怖

太古に昔に使われていた魔術は科学によって打ち消されたが魔法という形で現代の技術に蘇った。

そんな太古の異物が何故、再び現代に戻ってきたのか。

その現象は二二世紀、日本のとある小さな村で確認された。

一〇月一日、村民全員が殺される事件が発生した。現場で警察はまず最初に調べたのが犯人の発見の手掛かりを探すのではなく『なぜこんなことができたのか』を調べた。そう、まだ五歳にも満たない子供が『たった一人』で異様に輝く紅い液体のようなもので全員殺したのだ。

それが過去最初の魔法が確認された記録だ。

当初の技術や情報からして政府、情報当局、評論家ましてや世界最高の科学者と呼ばれた男でさえ『異常現象』としか説明できなかった。

幾ら現代の技術が進歩したところでその『異常現象』が解明されることはなかった。その『異常現象』を使用した少年に聞いてもその使用していた時だけ記憶がなく観察と危険因子保護という目的で施設に保護されることになった(だが保護というより監禁という言葉が合っていたかもしれない)。

そして『異常現象』は『超能力』や『特殊な生物』と呼ばれその『異常現象』はただ謎だけを残した。

どんなに研究や実験を重ねてもその『異常現象』の再現は不可能とされ、別に現代の技術に役に立つこともなく恐怖だけを残してその謎は世界の隅っこに忘れ去れた。

だが、数々の有力国家が研究を重ねていくにつれその『異常現象』を使用する宗教組織がこの現代の表舞台に登場し始めた。

そして人を殺し尽くし謎と恐怖だけを残し忘れ去れた『異常現象』は『魔法』によって再現が可能となった。

『異常現象』は『魔法』とかわり現代の様々な技術に絶大な影響を与えた。

そして人々は旧式術式を『魔術』と呼び新式術式を『魔法』と呼んだ。

そして今、魔法を使う者『魔法士』、『超能力者』を育てることに様々な国家は競争となっている。

だが、人は気を付けなければならないその『魔法』という技術で人は時に弱者を喰らう獣になり、時に神になろうとする魔法使いは一步間違えば核兵器以上の兵器になりかねない。人々の油断と優越感はずらを墮落へと導く小さな悪の灯火なのだから。

そして『魔法士』としての証を魔法専門学校に通い手に入れるべく生徒たちの戦いも続いている。

国家魔法士資格。

『魔法士』であることを証明する証であり、『魔法士』にとつて誇りにも値する物になる。国家魔法士資格試験は『魔法士』になるために通らなければならぬもので特に厳しい試験で筆記・精神鑑定・実技など様々な試験を合格しなければ得られない超難関の資格である。

だがそれらの試験を終え合格して『魔法士』になろうとそこでゴールというわけではない。

合格しても一年毎の査定がある、研究成果のレポートと実技。軍や研究所に所属するものは日々の業績・実績などを評価に合格しなければ資格を剥奪されるという厳しい内容である。

魔法専門学校で通おうとも必ず合格するとは限らない。

だが国家試験に落ちても、もう一つの道がある。

それは『超能力者』というものだ。

『魔法士』を育成していく過程でもう一つの能力者『超能力者』

が生まれた。

『魔法士』と違って多彩に魔法が使えるわけではなく、一つの魔法しか使えない。だが、同時にその一つの魔法を脳に直接定着させ特化させることで技術面で劣るところもあるが戦闘力では『魔法士』より上になる。

『魔法士』は科学者で、『超能力者』は軍人といえるだろう。

『超能力者』は、簡単に魔法が使用できるようになるが対価として一度魔法を脳に定着させるともう二度と他の魔法、魔術でさえ使
用できなくなる。

分かれ道があるだけでどちらか両方を選んで結局競争、戦いは終わらない。

これが魔法の世界、これが才能の戦い。

最早、平等な教育などはもう存在しない。

実力、才能、それがなければただの無能だ。

この場所では無能は落ちこぼれでしかない。

だが、そんな無能な化物が世界の脅威になるとは誰も知る由もない。

埃が蔓延する廃墟と化した予備校のビル。

殆どの人が眠り込んでる深夜四時。

雲に隠れ微かに漏れる月の光がこのビルでの唯一の明かり。

そんな予備校として機能していないこの廃墟ビルで不意に後から鬼柳雁也にとって忌わしい三〇代前半と思われる男の声が耳に入ってきた。

「久しぶりだね。『大魔王』君」

月の光が届かない教室の奥で影に隠れながら男の声が教室で響いた。

だが、雁也は声の根源である後の影に隠れている男の方へ向くこ

とは無くただ、黒板だけを見つめていた。

「何が大魔王だ。別に俺はそんな化物になつたつもりはない」

「だって君の中で大きな大魔王を飼っているじゃないか」

少し肌寒い夜の風が雁也の黒いコートを捲り上げる。コートの下には何処かの学校の制服だろうか、白をベースに緑、黒、青といった明るいイメージのある制服である。

「やっぱり王光にしたんだね、雁夜くん」

「そんなことをお前に言われるようなことじゃない」

気軽な口調で話す影に隠れる男をよそに雁也は静かな怒りのある生真面目な口調で答える。

「いつもは普通にしゃべるのにね、やっぱり俺嫌われてんのかな？」

雁也は別に答える様子もなくただポケットに手をつ込み月の光に当たりながら静かに目を閉じた。

再び開かれた眼には黒と白に染まった普通の人間の眼というものが一切なかった。雁也の眼には紅い丸とそれを包むように白があり獣の眼に近かった。

すると影に隠れた男は背中だけを向けている雁也の眼をまるで見たかのように口を開いた。

「やっぱり目的はそれかい、“神の子の血を受けた槍”と“全ての願いを叶える杯”を手に入れるためだけに入学するのかい？」

「あたり前だ。俺の中で蠢く寄生虫を一刻も早く駆除するためだ」

「たとえ鵠ぬえ・・・いや『十尾』を殺せたところで六割を『十尾』の肉体で補っている君の体じゃ、元の体に戻れたと言っても死ぬだけだよ。ああでも今の医療技術で生きられるけど薬漬けにされて臓器機能の代わり機械付くしの体になるのが落ちだよ？」

「そのための『聖杯』だ」

雁也が『聖杯』と口にするるとそれを聞いた影に隠れる男は急に黙り込み腹を抱えて笑い始めた。

「ハハハハ！まさか君、『聖杯の代償』を忘れたのかい？幾らすべての願いを叶える万能の願望杯でも無料ただで叶えるってわけじゃない

「いんだよ？」

だが、雁也は影に隠れる男のことなど気にとめる事もなく顔色一つ変えず淡々と呟いた。

「そんなこと百も承知だ。『聖杯』の特質など一族じゃ、子供だって知っている」

「願うものによって対価は変わる。物だったらそれその物の物を出すだけのことだけど。命といっちゃ、最低でも人三人ぐらいの命は必要だよ？」

そして、ようやく雁也は顔色を変え口元を大きく広げ不気味な笑みを浮かべた。

狂喜に満ちたその笑い陽気に喋っていた影に隠れた男でさえ恐怖を覚えた。

「今となっちゃ、俺にとって人の命なんてどうでもいい。魔法を使う殺し屋で魔術師殺しと呼ばれてきたんだぜ？今更、命だとうとう言ってられるか」

生真面目な口調が崩れいつも通りの普通の高校生が喋る口調へと変わった。

いくら一割も満たない開放状態で『十尾』の狂気が雁也の精神に大きく影響を与える。

「施設内じゃいい子だったのにねえ、虫さえ殺すのに躊躇う優男だったのに、雁也くん。いつたいこの脱走の十年間で何があったんだい？」

影に隠れる男の質問など無視して、ようやく後に目を向けた。

禍々しく輝く紅い眼を影に隠れる男に向ける。

「目が覚めたんだよ」

それだけを呟くとその後何も言わず出て行った。

取り残された男は影から出て、ポケットにしまっていた煙草を口にくわえ火を着けた。

「それ、墮落への引き金だよ。雁也くん」

月の光から外れた教室の影からツンツンの銀色の髪を揺らし独特

なアロハシャツを着ながら男の声が誰もいない古びた教室でまるで山彦のように響いた。

とある男の話をしよう。

男は人を殺すことに長けていた。

誰よりも強さを求め、誰よりも皆の救いを願った呪われし一族の長だった。

自分の幸せを憎み、ただ人の幸せを奪ってきた。

そして、男は考えた。

人を苦しませずに殺す化物を作ること。

生命力、魔力に反応し相手を殺すことを本能に殺すことを学習する生きた機械を作り出そうと八倒した。

村に住む異形の物を捕まえ実験を重ね、ある化物を作り出した。

それが鵺ぬえまたの名を雷獣。

厄病を運び毎晩、黒煙とともに不気味な鳴き声を放つ妖怪。

日本の合成獣キメラと言ってもいいだろう。

平家物語などに登場しサル顔、タヌキの胴体、トラの手足を持ち、尾はへびで文献によつては胴体については何も書かれなかったり、胴が虎で描かれることもある。

源頼政によつて葬られた鵺は鵺塚に肉体を封じられた。

だが、その男は長年封印されていた肉体を掘り起こし、葬られた鵺の魂の代わりに十の人工靈魂を入れた。

それが後、雁也の中に封印される『十尾』だ。

十の尾が生えた鵺。

それが『十尾』だ。

人間を殺すためだけに造られた合成獣キメラ。

不幸を呼び、死へと誘う究極の化物。

後に男は後悔することになる村人の幸せを願って造り出した化物

に幸せを喰われる運命を辿るのだから。

入学式まで約一時間を切った。

夜中、予備校の廃墟ビルの中で男と話した後、別に家に帰ることなくやることもなかったので王光の近くの公園で携帯端末を使ってネット小説を讀んでいたり王光の情報をただ見ていた。

私立大学付属王光高校。

数多い魔法科専門学校の中で日本最大の魔術家系・おおみわしぞく大神氏族の五本の指に入るほどの有名で知られる高等学校だ。

毎年、多くの魔法科大学の卒業者を出し様々な歴史がある。

そしかも王光は他の魔法科高校より少し変わった高校でもある。

普通なら魔法が使えるエリートだけが魔法科学校に入るわけだが、王光は魔法を学ぶことを望む者ならば誰でも受け入れる高等学校なのだ、と書いてあるYohuuの知恵袋を携帯端末で黙読する雁也。ピピイ、と一時間たったことを知らせる音が端末から出て携帯画面から目を離す。

やっと一時間前か・・・と疲れきった背筋を伸ばす。

王光の門が開かれ校門で待っていた在校生が入っていった。雁也もそれに続いて入る。

一時間前ということでもまだ多くの人はいない。

雁也は適当に座れる場所を探すため校内を歩き回っていた。

学生寮、売店、その他の学校施設を見てもはや学園都市と呼んでも間違いはいないだろう。

「あら、私以外にも新入生がいるなんて」

すると雁也の後から女性の声が聞こえた。

振り向くと雁也とは大違いな希望に満ちた笑顔が待っていた。

肩まで伸びている綺麗な黒髪に整った顔立ち、少々子供っぽいが美人の類に入るだろう。

雁也のような平凡すぎるといつてもいい様なこの容姿でこの様な美少女に話しかけられることはよっぽどの事がない限りありえないだろう。

だが、雁也は照れるどころか顔色一つ変えず、小さな作り笑みを浮かべ返事をする。

「楽しみで早く起きちゃいましてね、時間も見ずに来ちゃったんですよ」

ハハハ・・・と雁也は苦笑いを出すが目の前の美少女は、嘘偽りもなく笑っている。

「私も入学が楽しみで早く起きちゃって、私達似た者同士ですね」「いや、共通点一つでそこまでいかないでしょう」と雁也はツッコミを入れ美少女の笑みに続いて苦笑いを浮かべる。

「ハアハアハア・・・お嬢様!」

すると息を切らしながら美少年の単語が似合う同じ新入生と思われる男が近づいてきた。

お嬢様と呼ばれた美少女の近くに止まるとハアハアハアと荒かった息をふうーと深呼吸だけで通常の呼吸へと戻した美少年。

「お嬢様、捜しましたよ!! 勝手にいなくならないでください!!」

「ごめんなさい、近衛」

近衛と呼ばれた美少年は美少女に注意した後、雁也の方に目を向けた。

「其方の方は?」

「鬼柳雁也です」と雁也は自己紹介も可ね一礼する。

すると近衛は鬼柳という言葉聞いたとき眉を顰めた。

「私の名前は土御門夜織、こっちは蘆屋近衛です。今後よろしくお願ひします」

手を差し伸べた夜織。雁也も握手をしようと手を差し伸べたと同時。

パチイン!と近衛に手を弾かれた。

「そんな毛皮らしい手でお嬢様に触れるな!!」

両方、刹那の間、硬直し夜織が口を開いた。

「近衛、何をするのです!!!」

「お嬢様、こいつは鬼柳家の者です。術者殺しの咎人に触れられてはお嬢様が穢れます。」

「そんなことで手を弾くことはないでしょう!!!」

「いえいえ、いいんです。嫌われるのは慣れっこですから」

「ですが!」

「いや、いいんです」と夜織が反論する言葉を無視して雁也は口を動かす「じゃあ、自分はこれで」と付け加え二人から逃げるように立ち去ろうとする。

「あつまって!」

夜織の言葉を無視して雁也は足を動かす。

大分、離れた時、雁也は後を向いて二人の姿が見えないことを確認して近衛に言われたことを不快に思うわけでもなくただ普通に思考を働かせる。

(土御門家も入学するのか……やはり、聖遺物の情報が漏れているとしか考えられない……土御門家だけじゃない……他の組織、まして国外の人間までもが入学する可能性がある……)

思考を働かす、不意にさっき聞いたことのある声が後から聞こえた。

「鬼柳さん!!!」

後ろを向くと走っていても気品を感じる女性がいた。土御門夜織だ。

近衛の目を盗んで抜けてきたのだろうか。

「土御門さん。どうかしましたか?」

「さつきは近衛が失礼なことをしました!」

美少女相手に顔色一つ変えなかった雁也の中に驚きを感じた。普通、こんな男に頭を下げることない女性が普通に礼をしている姿があったのだ。

「いついえいえ！全然気にしていませんから、そんな貴方みたいのが俺なんかに頭を下げることはないですよ！」

「いえ、近衛の失言を私が見過ごすわけにはいきません。土御門家の時期頭首として心から謝罪を」

「だから、大丈夫ですつて。蘆屋さんのことは、気にしていませんから。しかも鬼柳家は何年も嫌われてきた一族ですし」

嘘の無い笑みを浮かべるが一向に頭を上げる気配がしない。

本当に気を悪くしていないことを証明するように手を差し伸べる。

「だから改めて今後、宜しくお願いします。土御門さん」

すると夜織は、顔を上げ不安気な顔から笑みに変わり差し伸べた手をぎゅっと握り口を開く。

「こちらこそ」

そう答えると、手を離れたぶん近衛が待っていると思われる場所へと戻っていった。

ふう・・・と体が開放された感覚になり、疲れが押し掛かる。

夜織の笑顔、態度、このまま話し続けていたら、入学式どころではなかった。

そして雁也自身はどこかに恐怖を感じていた。

その恐怖は何回があった。

悪意ない無邪気な声、嘘偽りの無い笑顔。そんな普通の存在が雁

也自身にとつて恐怖だった。

悪に生きた罪人にそんな物は飾りでしかない。

それなのに自覚しているはずの恐怖が雁也を蝕んでいく、『十尾』という呪いを抱えながら善意と悪意が雁也の中で渦巻いていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9677y/>

ギルティ ~ 罪を背負う聖者 ~

2011年11月29日01時58分発行